

男二人、中央でテーブルを見つめている。カラカラとマウスの回し車の音が鳴っている。

男1 高橋君、これを見たまえ。

男2 すごいスピードですね。マウスの走るスピードとは思えない。

男1 成功だな。

男2 何をしたんですか？

男1 これを飲ませたんだ。

男1、ドリンク剤の瓶を見せる。

男2 これは、何ですか？

男1 私が作った、鬼元気になるドリンク剤。

男2 鬼元気になるドリンク剤？

男1 三分間だけだけど。

男2 三分間だけなんですか？何が入ってるんですか。

男1 子供のころ憧れなかった？ウルトラマンとかヒーローに。たった三分でもいいからさ、ヒーローみたいになりたいと思ってる。

男2 それでこのドリンクを作ったんですか。で、中身は何が・・・。

男1 飲んでみるか？

男2 僕がですか？

男1 君以外ないだろう。

男2 いや、でも、僕は遠慮しときます。

男1 なぜだね？

男2 だって、なんか、何が入ってるかわからないもの飲むのはちよっと。

男1 飲めばわかるから。

男2 いやー、でも

男1 君がさ、なんだか、最近元気ないようだったからさ、元気をつけてあげようと思って。

男2 お気づかいたいただいております。でも、遠慮させていただきます。

男1 動物実験には成功した。見たまえ、鬼元気だろう。

男2 確かに鬼元気ですけど、

男1 この薬はね、歴史に残るような大発明だよ。どうだろう。この薬に、君の名前を入れてあげようじゃないか。名づけて、グルコサミン・コンドロイチン・エトセトラ・タカハシ・ゼット！

男2 最後のゼットってのは何ですか？

男1 アルファベットの最後の文字。究極の強さを表す。

男2 ダサイ！

男1 さあ飲んで。

男2 勘弁してくださいよ。…あれ？マウスが動かなくなりましたよ。死んだんじゃないやありませんか！

男1 大丈夫だ。死んだりはしないよ。ほら、これももう一回飲ませれば・・・。

男2 ピクリとも動きませんよ。

男1 疲れただけだ。しばらくすれば復活する。

男2 死んですすよ、絶対！まさか、この薬は、常人の数倍のスピード、筋力、知覚力、判断力、まさに鬼のように能力を発揮できるが、しかし、寿命を削って最後は死に至らしめる、禁断のドーピング剤では？

マウス、また元気に走り始める。

男1 ほら、元気になったろう？

男2 あ、ホントだ。

男1 飲んでみる？

男2 いや、僕はそんなに元気にならなくてもいいですから。

男1 そんなこと言わないで飲んでみてよ。

男2 でも、これまだ認可前の薬ですよ？臨床試験もしてないんでしょう？どんな副作用があるかわからないじゃないですか。だから、キチンと手続きをして、それから人に処方すべきじゃないですかね。

男1 これは菓じゃない。健康食品だ。滋養強壮に効く栄養ドリンクだ。

男2 今、葉って言ったじゃありませんか。

男1 なんだ君はごちゃごちゃと。田淵君は快く飲んでくれたよ。

男2 田淵君飲んだんですか？大丈夫なんですか？

男1 うん、昨日。今日も元気に大学来てたよ。普通に講義を受けてたし、特別問題はない。

男2 だったら、僕が飲まなくてもいいんじゃないかな。

男1 君にもぜひ協力してもらいたいんだよ。

男2 でも、やっぱり、ちよつと。

男1 健康な人の、客観的なデータがほしいんだよ。

男2 そもそも、滋養強壮に効く栄養ドリンクなら、ちよつと体調の悪い人のほうが、より効果がわかるんじゃないですかね？僕が飲んでもあんまり意味がないと思うんですけど。

問。

男1 高橋君。最近、彼女に振られたんだってね。

男2 なんでそれを？

男1 苦しかっただろう？

男2 そ、それは・・・。

男1 悲しかっただろう？死にたいくらい悲しかっただろう？

男2 ううっ。

男1 このドリンクを飲めば、すぐに元気になるよ。飲んでくれる？

男2 いやです。

問。

男1 なぜなんだ。

男2 なぜっていわれても…。そんな中身のわからないもの。

男1 よし、わかった。じゃあ、こうしよう。

男2 どうするんですか？

男1 いや、君に新しい彼女を紹介しよう。それでどうだ？

男2 え？

男1 君を振った不細工な彼女とは全然違う、学園のマドンナ、ミス城南だぞ！

男2 え？あのミス城南？

男1 そうだ。デートしたくないか？彼女の前でいいとこ見せたくないか？

男2 そ、それは・・・。

男1 彼女の前で、バリバリ動く高橋君を見たら、きっと君に惚れることは間違いない。

男2 ぼ、僕に惚れる？ミス城南が？

男1 ミス城南が彼女になったら、君を振った元カノにもきつと後悔させられる。どうだ？

男2 もし、ミス城南が彼女になったら、他の学生にも自慢できますかね？

男1 もちろんだとも。さあ、どうする？

男2、少し悩むが

男2 やっぱり、やめときます。

男1 なぜなんだ、高橋君。

男2 だって何入ってるか教えてくれないじゃないですか。

男1 副作用は起こらない。私が保証する。

男2 じゃあミス城南だけ紹介してくださいよ。それで十分元気になるますから。

男1 よしわかった。ちよつと、このドリンク持って。

男1、ポケットから、ひもにぶら下げた五円玉を出し、男2の顔の前でぶらぶらさせる。

男1 君はだんだん飲みたくなる。おいしいドリンクを飲みたくなる。飲みたくて飲みたくてたまらなくなる。さあ、どんどん飲みたくなる。

男2 五円玉を奪い取る

男2 飲みませんよ。

男1 くそー。

男2 催眠術なんてかかりませんよ。あ、またマウスが死んでますよ！

男1 だから死んでないって。また飲ませれば。

間

男1 ほら、元気になった。いや、実はね、高橋君。ある食品会社から、このドリンクを買いたいという話があつてね。君が協力してくれたら君にもお礼ははずむよ。

男2 お金なんかもらっても。

男1 これでどうだ？

男1、指を一本立てる。

男2 十万ですか？

男1 まさか。

男2 百万円？

男1 いやいや。

男2 一千万？

男1 どう？

男2 いや、無理です。

男1 なぜなんだ、高橋君。

男2 お金より体が大事だからに決まってるじゃありませんか。

男1 高橋君。実はね。

男2 何ですか。

男1 わたしはね、もう長くないんだよ。

男2 え、病気ですか？

男1 うん。

男2 どこが？

男1 膝が痛いしね、最近は、めもしよぼしよぼするし、

男2 そうですか。お断りします。

男1 そんなこと言わないでさ。飲んでみてくれないかな？

男2 無理ですよ。

男1 あそう。じゃあ、君の単位もあげられないな、卒業も一年延びるかな。

男2 卑きようですよ。単位を人質に取るなんて。

男1 もう、最後の手段だもんね。飲んでくれなかったら、単位あげない。

男2 くそー。

男1 田舎のお父さんとお母さんは泣くだろうね。どうする？飲む？

男2、逡巡するが

男1 飲まないなら、退学にするぞ。

男2 そんな…。

男1 大丈夫。副作用もない。単位もあげるし、レポートもエープラスあげるよ。どう？

間

男2 もお、わかりましたよ！飲みますよ。飲めばいいんですよ。

男1 そうか、決心してくれたか。よかった、よかった。はい。

男1、男2に瓶を渡す。男2が飲もうとした時、マウスの体が爆発する。

男2 ま、マウスが爆発しましたよ。

男1 そんなバカな、ははは。

男2 いやいやいやいや、なに落ち着いてるんですか？このドリンクを飲んだマウスですよ。

男1 そうだが、いやまさか。ドリンクのせいで爆発はしないだろう。

男2 だって、それ以外に考えられますか？

上から爆発音が聞こえる。と、同時に地震のような振動がおこり、二人は瓦礫にうまり、動けなくなる。

るんだ！今すぐに、そのドリンクを飲みなさい！

間

男1 高橋君。生きてるか？

男2 いやです。

男2 生きてます。先生は大丈夫ですか？

男1 体は無事だ。でも、瓦礫に挟まって動けない。

瓦礫が崩壊する。

男2 僕もです。あ、携帯。携帯で助けを。ダメだ。携帯も圏外で助けを呼べそうにありません。

男1 私のもだ。まずいぞ。これでは助けがくるまでに、時間がかかる。

了

瓦礫が崩れる。

男1 高橋君。・・・返事をしろ！

男2 せんせい・・・。

男1 少しづつ瓦礫が崩れてきている。

男2 先生・・・。この爆発は田淵君じゃないんですか？

男1 ま、まさか・・・

男2 きつと田淵君だ。あー・・・。

男1 まだ、田淵君と決まったわけではない。しかし、このままでは、二人とも死んでしまうぞ。

男2 いやだー。こんなところで、死にたくない。

男1 高橋君、君の前にドリンクの瓶が転がっている。手が届くか？

男2 届きません。

男1 届くだろう！手を伸ばせ！君がそのドリンクを飲めば、この瓦礫から助かるかもしれないぞ。

男2 僕が飲んだら、爆発してどうせ死ぬじゃないですか。

男1 飲んだからと言って、爆発するとは限らないだろう。しかし、今それを飲めば、君はヒーローになれる。三分間でもヒーローになれば、君は有名人だ。テレビや新聞にも出られるし、CMの出演依頼も殺到するぞ。そうなればお金は儲かるし、女の子にもモテモテだぞ。さあ、今、ヒーローにな